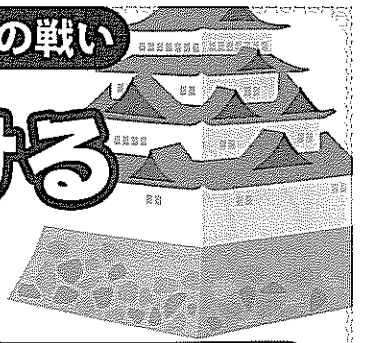


約400年前の山辺町における、もう一つの関ヶ原の戦い

けい ちょう

慶長出羽合戦における 畑谷城攻防戦



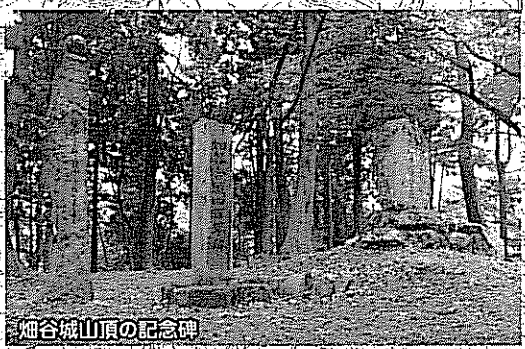
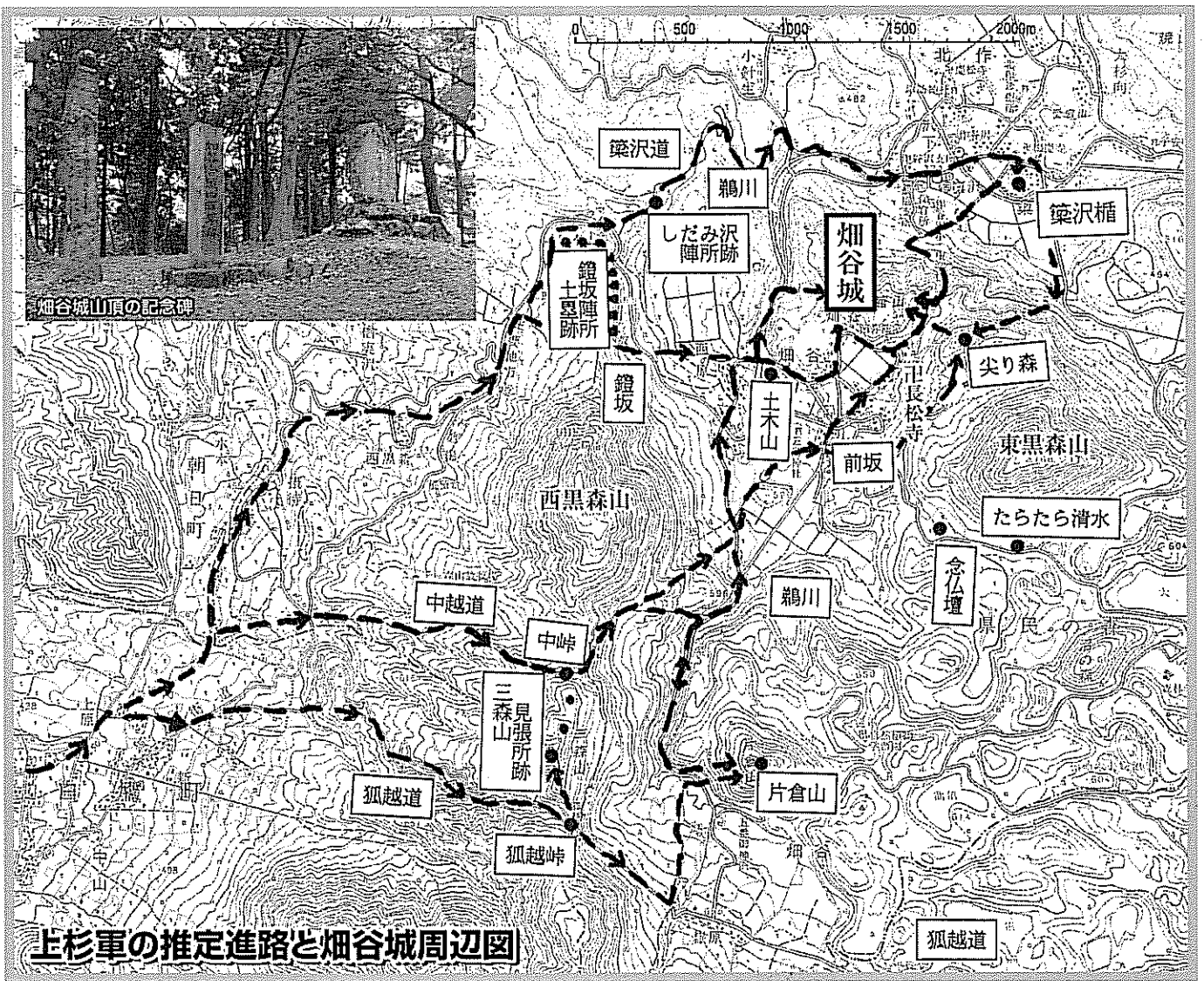
1 畑谷城攻防戦 ~最上武士の面目をかけ、「義」に殉じた武将の戦い~

慶長5年(1600)旧暦9月11日、山形城攻略を目指した上杉勢の本軍は、直江兼統を総大将として米沢を出発した。そして、長井街道を北進、白鷹丘陵を横断・東進して、12日畑谷城を攻撃した。

畑谷城主・江口五兵衛光清は、山形城主・最上義光から、引き上げて山形城に合流するようにとの指令を受けたが、武将として敵を目前にして逃げるような道は取れないと、その指令を断った。また、江口を高く評価していた直江兼統からは上杉勢への協力を勧められるが、それも断り、畑谷城南部山麓部の鵜川をせき止め、水堀として備えを固めていた。

上杉勢は本陣を片倉山に置き、正面攻撃は片倉山より下り、上郷・前坂・土木山・西の原方面に陣を構えた。一隊は前田慶次郎を隊長として馬牽原より一本木峠を通して築沢方面に下り、北方から攻撃する態勢であった。

12日から攻防戦が始まり、翌13日には水門が破られたため、水堀の水も引き、二時(4時間)の攻防戦で畑谷城は落城した。直江は「去十三日最上領畑谷城乗崩 撫切(皆殺し)申付、城主江口五兵衛父子共首五百余討捕候」と書き送っている。



畑谷城山頂の記念碑

畑谷城は、研究者による全国的観点から「戦国期ならではの遺構を良好に保つ三十の城址の一つ」に選出されている。東北地方では、青森・浪岡城、会津若松・神指城、そして、山辺・畑谷城が選ばれている。

現在、畑谷城址愛護会により管理・保護されている。（番号は右の地図の位置を示しています）

② 長松寺（江口公の菩提寺）

曹洞宗、江口光清公の開基を伝える寺だが、それ以前から存在したらしい。江口公の墓と並んで、畑谷城400回忌記念碑の立つ墓地がある。



江口公の墓

③ 東部の壮大な大空濠と堅濠

東部の尖り森に接する部分には大空濠が掘られ、高く盛り上げられた土塁は尖り森からの見通しを妨げる。各所に数本の堅濠が用意されて横の移動を妨げている。山麓部の、畑谷地区から築沢地区に通ずる道路のそばの周辺には、壮大な空濠が連続して掘られている。館山側中央部と南端部（大手口）に山頂への山道があり、北端の尾根伝いの山道が揃って口となっている。



④ 畑谷城を囲む空濠と二重濠

山頂から南方向に緩傾斜となり、階段状の帯曲輪がめぐらされ、その下部の空濠は山頂部周辺の東～北～西～西南とまわり、西～西南部は二重濠となっている。東南部は急峻なので濠は用意されていない。南端部が東部山麓部からの山道を登った虎口で約90度曲がり、山頂部を目指す。

⑤ 畑谷城は館山を主郭とする山城

南部に比高差70mの畑谷地区、北部に比高差170mの築沢地区の中間に位置し、東は標高766mの東黒森山から西に575mの尖り森、549mの館山と続いている。その西方はやや高原状の尾根となり、西端は急傾斜して断崖状となり、下部を鵜川が流れている。

西からの攻撃に備えた三重濠

主郭下部の濠から西方にかなり平坦な部分を約100m行くと、大規模な西部・三重空濠に達する。尾根の平坦な部分が三重濠で、南部の方においていくと二重濠になる。鵜川の西部の急峻な崖をよじ登って攻められた場合に備えて用意されている。

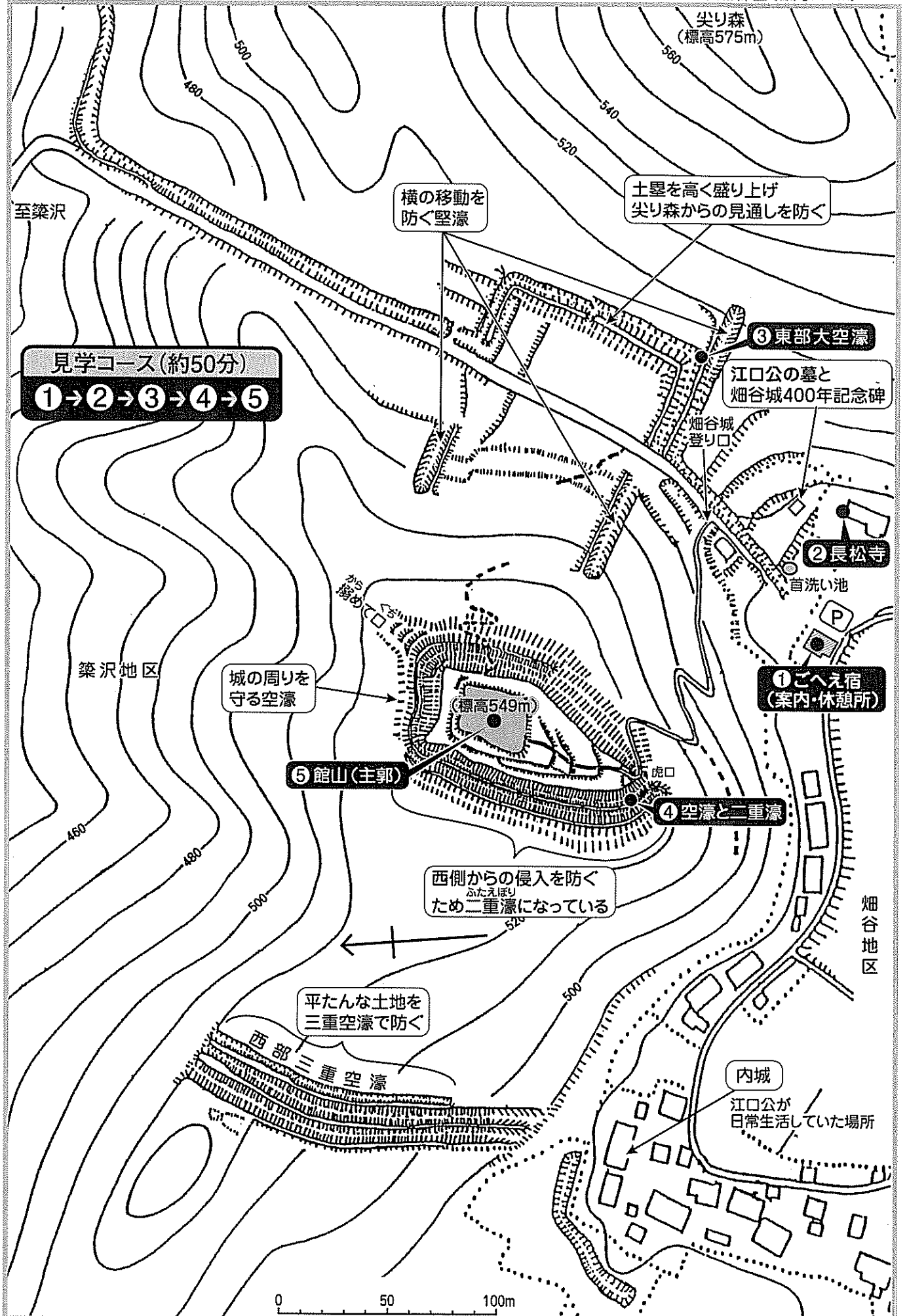
念仏壇（百人塚・戦人塚）

畑谷城攻防戦で亡くなった飯田播磨守を始め、多くの戦没者を葬った地という。

明治32年、300回忌を期して供養碑が建てられている。

鐙坂（馬牽原高原）陣所土塁跡

上杉勢が畑谷城を攻撃するにあたり設置したと思われる100m以上にわたる陣所・土塁跡。鐙坂を上った馬牽原高原の山際にあり、畑谷城をすぐ眼下にする地。



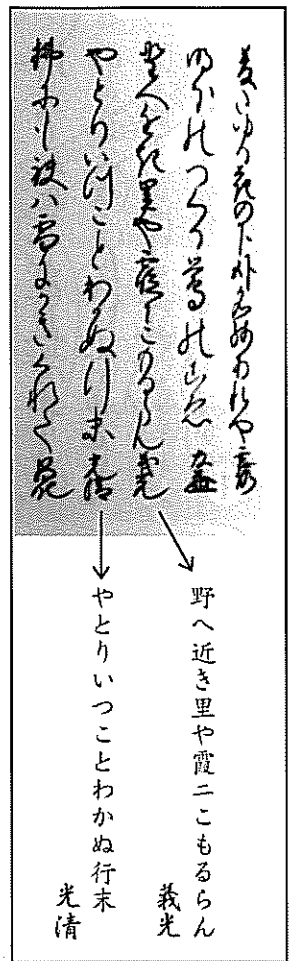
『畑谷城主江口五兵衛光清四百回忌供養塔建立』記念誌では、「五兵衛は、天文13年(1544)斯波頼宗の長男として摂州に生まれ、国時といい、のちに姓を江口と改めた。永禄5年(1562)、18歳のころ最上義光に仕官。33歳で戦功を立て、義光公より光の一字を賜り、光清(あききよ)を名乗った。その名は主君義光公のもとで連歌をたしなむ文学的な教養を身につけた、ゆかしい人柄の証でもある。」と記している。

江口は、最上義光の信頼が厚く、村木沢・長岡楯主から畑谷城主として移った。畑谷城は、鮎貝・荒砥地区から山形方面への侵入に便利な地形にあり、上杉勢は畑谷城～長谷堂城～山形城と進攻する計画であったため、重要な境目の城を預かることになったのである。

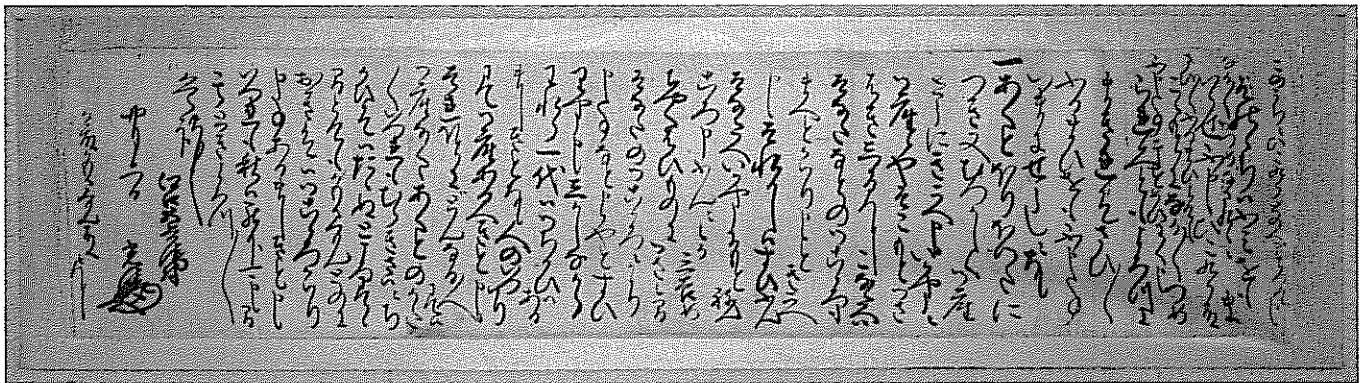
直江兼続は江口を高く評価しており、なんとかして味方につけたいと考えた。しかし、江口が降伏しないため、畑谷城の攻撃にあたっては撫で切りを命じ、江口以下、五百あまりの首を打ち取っていることが判明する。

江口は「武将」としてだけでなく、「文化人」としても優れた業績を残している。最上義光公の上洛に同伴し、京都の人々と交流するときは、その補佐役を勤めた。そして、最高の文化人たちと一緒に参加した連歌の席で、多くの作品を残している。

江口は、親としても情に厚い人物であった。親友の(山形市)悪戸楯主・加藤掃部にあてた書状には、お互いの消息を尋ね友人としての気持ちを述べ、加藤掃部のもとで暮らしている自分の息子・三吉にも触れて、弱輩者であるから気になることがあるのではないかと、子供を思う親としての情があふれている。



最上義光歴史館・所蔵



江口光清の加藤掃部にあてた書状(加藤掃部家・所蔵)

